

議題2 学生の出口対策について

◆23A-II 京都大学

プログラム名：強靱な国づくりを担う国際人育成のための中核拠点の形成－災害復興の経験を踏まえて－

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

- ・本プログラムに参加した京都大学学生の進路は、半数以上がゼネコン、プラント会社、および電力・ガス会社であった。これらの各社はいずれも「インフラの海外輸出」に関連する分野であり、海外経験を有する人材の確保に積極的である。このような状況を踏まえて、関連会社へ本事業の協働教育プログラムについて積極的に紹介を行っている。
- ・派遣学生の感想（一部）は以下のとおり
より海外志向が強くなった。さらなる長期留学に挑戦してみたい。
現地の学生のやる気に刺激を受けた。国際的に活躍できるよう積極的に学習したい。
防災に係わる仕事の思いが強くなった。
英語力や国際的な感覚をもっと身につけたい。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

- ・本プログラムに参加した ASEAN 連携大学学生が京都大学大学院工学研究科博士課程へ入学したい意思を示した場合には、個別相談にのるとともに、希望する分野を紹介している。
- ・アジア工科大学から参加した学生が京都大学大学院工学研究科博士課程の入学試験に合格し、社会基盤工学専攻に入学した。

◆23A-II 大阪大学（広島大学、名城大学、長崎大学）

プログラム名：「アジア平和＝人間の安全保障大学連合」を通じた次世代高品位政策リーダーの育成

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

- 例1：メインプログラムへ参加した長崎大学の学生の多くは、医師あるいは看護師資格を持っており、メインプログラムでカンボジアへ留学し、期間中に医療 NGO でのインターンシップを実施した学生1名は、経験を生かして海外青年協力隊へ参加している。
- 例2：メインプログラムで派遣した大阪大学の学生の内2名は、期間中の研究や調査成果を基に博士論文を作成し、博士後期課程を修了したのちに本研究科の招へい研究員として研究を続けている。
- 例3：フィリピンへ派遣した大阪大学の学生の内1名は、プログラム修了後に修士課程を修了し、博士後期課程へと進学した。
- 例4：タイに派遣したある学生は、修士修了後、コンサルタント会社に就職し、発展途上国の開発プロジェクトに携わっている。
- 例5：タイ派遣したある学生は、修士修了後、大手新聞社に就職し、特派員をめざして仕事に邁進している。
- 例6：タイに派遣したある学生は、修士修了後、金融機関系シンクタンクに就職し、アジアを含めた経済・社会の動向を分析する仕事に重視している。
- 例7：インドネシアに派遣したある学生は、修士修了後、高校の社会科教師となっている。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

例１：デ・ラ・サール大学所属学生がH25年度広島大学で実施した10日間程度のサブプログラムへ参加し、H26年4月からメインプログラムで1学期間大阪大学へ留学をした。その後、H26年10月から現在まで大阪大学大学院国際公共政策研究科の研究生として留学中である。H27年10月より同研究科博士後期課程へ進学する予定。

例２：受け入れたパンナサストラ大学学部生は学部修了後、カンボジア王国外務省に入省した。

例３：受け入れたシアー・クアラ大学学部生は学部修了後、インドネシア大学法学大学院（国際法）に進学した。

例４：受け入れたパンナサストラ大学大学院生は、帰国後、ヨーロッパの大学への留学が決まり、修士課程を継続中である。

例５：受け入れたデ・ラ・サール大学の大学院生は、修士修了後、マニラの日本大使館に勤務している。

◆ 23A-II 早稲田大学

プログラム名：アジア地域統合のための東アジア大学院拠点形成構想

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

学生の出口対策においては、早稲田グローバル・アジア・セミナーとして、プログラムに参加した学生だけでなく、プログラムに興味を抱いている学生も含めて、セミナーを実施している。本年度も、2015年6月30日に学部生・院生向けに「The Role of Development Consultants in Asian Regional Cooperation」と題して、開発コンサルティングの現場で20年以上、主に地域・都市・インフラ開発に伴う環境、経済、社会調査、組織体制構築、評価業務を中心に従事してきた開発コンサルタントを招いて、セミナーを実施した。当研究科教員をモデレーターとして、活発なやり取りがなされた。

こうした実務家の話を聞く機会も作ることで、人文社会科学系の修士課程の専門知識を基に、日本に限らず海外で活躍できる人材育成の出口対策に取り組んでいる。学生の進学先の例は、以下の通りである。

また、留学先でのインターンシップも積極的に推奨している。特に国連機関などでのインターンシップは学生の積極性を喚起することが多く、出口対策のひとつの道筋を示してくれる。

例１：交換留学プログラムにてバンコクのタマサート大学に留学した学生は、タイの洪水調査を通じて、都市部の脆弱性について学ぶ機会を得、東京都庁に就職後、防災普及を担当し、その経験を活かしている。

例２：交換留学プログラムにて北京大学に留学した学生は、現地 UNDP（国連開発計画）にてインターンシップを行った経験を活かし、その後、国内大手新聞社ニューヨーク支社でジャーナリストとして勤務している。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

受け入れ学生については、日本での学業と共に、学術会議やインターンシップを経験した学生もあり、学生自身が主体的に取り組むことができるプラットフォームとなっている。一方で、博士課程在籍の学生がプログラムに参加するケースも多く、帰国後も学業を継続するため、就職先・進学先という形で成果が図りづらい点が挙げられる。学生の進学先の例は、以下の通りである。

例 1：交換留学プログラムにて当研究科に 1 セメスター留学後、正規留学生として修士課程プログラムに 3 名の学生が応募した。そのうち 1 名が当研究科に合格となり、現在修学中である。

例 2：タマサート大学より受け入れた学生が、タイ政府外務省への就職が内定し就業している。

◆ 24-I 北海道大学

プログラム名：人口・活動・資源・環境の負の連鎖を転換させるフロンティア人材育成プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

- 本プログラムでインドネシアの協定校に半年間留学した学生は、日本とは異なる環境の中で、且つ、通信状況が悪い中で就職活動を開始したが、留学の経験を企業にアピールすることで、見事に内定を獲得した（内定を得た学生全員が帰国子女あるいは留学経験者だったとのこと）。またタイに半年間留学した学生は、現地に駐在事務所がある企業に就職した。
- インドネシアおよびタイで北海道大学の同窓生向け懇親会を開催し、現地大学へ派遣した学生もこれに参加することで、学生が日本企業の駐在事務所に勤務する本学同窓生と交流する機会を提供した。また上記懇親会において、本プログラムの説明を行い、現地企業および現地の日本企業への興味喚起をはかっている。
- 平成 27 年度より「PARE インターンシップ」科目を新設し、インドネシア・タイの大学に留学中に現地でインターンシップを経験できる枠組みを整えた。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

- 本学の特別聴講学生として受け入れた学生が、修士課程修了後、本学の博士課程に進学した。
- 修士課程修了後に本学の博士課程に進学を希望する学生を除き、プログラムで受入れた学生の多くは母国で就職（大学、政府機関および国営・民間企業）している（現在までのところ、日本での就職を強く希望する学生はいない）。

◆ 24-I 東京大学

プログラム名：アジア都市環境保健学際コンソーシアムの形成

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

タイやインドネシアの大学に留学し、都市環境保健分野について実地的に学習・研究した経験を生かして就職した例がある。具体的な就職先として、JICA、日立製作所、伊藤忠商事など、都市環境保健分野において海外展開を行っている企業への就職事例がある。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

本プログラムで日本の大学に3か月程度短期留学した経験をもとに、さらに長期間(1年程度)の留学を行った事例がある。短期留学の期間中に、日本側指導教員と研究について相談した結果、より目的を絞った長期の留学につながった。

◆ 24-I 東京医科歯科大学

プログラム名：東南アジア医療・歯科医療ネットワークの構築を目指した大学間交流プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

本学が実施する海外派遣プログラムの多くは短期ではあるが、参加学生において以下のような事例がこれまで報告されている。

- ・タイ派遣プログラムに参加した数名の学生は、その経験を活かし、卒業後にアメリカの大学で短期研修を行った

- ・インドネシア派遣プログラムに参加した学生は、研修を通じ英語に対する自信を付け、研究体験実習コースで海外研修に自ら応募し、現在カナダで研修を積んでいる
など、欧米への自己研鑽のため更なる研修へ参加した者もいる

- ・タイ研修プログラムに参加した歯科公衆衛生の国際問題に興味を持つ学生は、その問題点を目の当たりにし、今後公衆衛生の大学院博士課程への進学を希望している

- ・ベトナム派遣プログラムに参加した大学院生は、その経験を活かし、欧米での国際学会での発表や、海外留学への興味を持つようになった

など、学生の進路への影響が見受けられた。また、海外研修を通じて、他国学生との違いを自覚し、一様に学習意欲が改善したように思われる。

以上のことから、本学では学生の進路に直接介入を行っていないが、短期であっても本事業の海外研修を通じ、学生の意識を外向き志向へ改革を起こすことができることが分かった。これから将来的に、臨床家・研究者として独立できるようになったとき、この経験を活かし、海外での発表や海外協力、国際交流について積極的に関わるものの増加が望まれる。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

短期のプログラムであっても、海外学生の学習意欲が高く、日本での進学を希望する以下のような事例があった。

- ・日本での研修を通じ、日本の医療技術・研究環境などに興味を持ち、本学の開催するサマープログラムに参加した学生や、本学大学院博士課程に進学した者がいた
 - ・研修プログラムで訪日したことをきっかけに、訪問分野の大学院博士課程への進学を希望したものがいた
 - ・ベトナムの大学院生は、研修を通じ日本の臨床技術に興味を持ち、本国に帰ったのち共同セミナー、ワークショップ開催などの本学との科間交流を企画、実施した
- 日本の大学への留学は資金的援助がないと敷居が高いということもあり、今後、進学希望者のため、受け入れ体制の整備が必要であると感じられる。また、相手国での進学先について、能動的なフォローが困難であることが課題である。

◆24-I 京都大学

プログラム名：「人間の安全保障」開発を目指した日アセアン双方向人材育成プログラムの構築

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

■プログラム参加学生は修学中であるため、事例はない。

■留学後の就職支援および留学期間中のインターンシップ実施のため、本事業ではH25年1月にクアラルンプールで現地日系企業を対象に、さらに京都で関西経済連合会を通して国内企業を対象に、本事業の説明と協力に関する協議を行った。平成26年8月には、ラオスおよびベトナムで実施した学部学生対象のサマースクールにて、ラオスでエネルギー開発事業を実施している日本企業の職員と本学引率教員・参加学生との会合の機会を設け、本プログラムの説明を行い、本プログラムで育成された人材の積極的な採用を要請した。平成26年10月には、外部評価委員会による本事業の評価を行ったが、外部評価委員の一人である関西経済連合会代表に、同連合会を軸に企業側に本プログラム参加学生の就職について配慮を求める旨の要請を行った。また同じく平成26年10月に京都国際会議場で開催されたSTSフォーラムにおいては来日したASEANの企業トップに京都大学総長からインターンシップの受入を要請した。今後、3年課程ダブルディグリーでは研究活動の一環として企業での短期インターンシップを組み込むよう、日本およびASEANの企業との連携をさらに進めると同時に、日本人学生については、就職を希望する企業へ本プログラムの説明を行うことで就職を支援する。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

プログラム参加学生は修学中であるため、事例はない。

◆ 24-I 神戸大学（大阪大学）

プログラム名：ASEAN 諸国との連携・協働による次世代医学・保健学グローバルリーダーの育成

① プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

（神戸大学大学院医学研究科・医学部）

例1：ほぼすべての学生が卒業後に2年間の卒後臨床研修を行っている。ただし、プログラム参加をきっかけに、海外への長期間の留学や将来における海外での医療活動に強く興味を持った学生もいる。

例2：平成24年度に単位取得プログラムでインドネシア大学に派遣した修士課程の学生1名が、本プログラムの運営・教育に興味を持ち、平成26年度より本プログラムの運営に関わる職員として採用されている（27年度は教育研究補佐員）。

（神戸大学大学院保健学研究科・保健学科）

例1：平成24年度に単位取得プログラムでインドネシア大学に派遣し研究研修を受けた修士課程の学生1名は大阪市立大学附属病院に就職し、その経験を生かしている。

例2：平成25年度に単位取得プログラムでアイルランガ大学に派遣した修士課程の学生は、現地での研究者との交流や新たな分野での研究研修の経験を活かし、製薬会社に就職している。

例3：平成25年度に単位取得プログラムでマヒドン大学に派遣した学部生の学生1名が、プログラム参加により、デングウイルス感染症の研究に関与し学んだことが感染症研究に興味を持つきっかけとなり、京都大学大学院生命科学研究科に進学している。

例4：平成25年度、26年度に単位取得プログラムでアイルランガ大学に派遣した学部生2名は共に大学院に進学し、現地で得た知識を生かし引き続き研究に従事している。

例5：平成26年度に看護実習の単位取得プログラムでチェンマイ大学に派遣した学部生2名が現地で病院実習プログラムに参加、タイ国の保健課題に強い関心を抱き、平成27年度に大学院に進学している。この2名の学生は、研究プログラムにより、チェンマイ大学で研究に従事する予定である。

例6：平成26年度に単位取得プログラムでチェンマイ大学での3カ月間の研究プログラムに参加した修士課程の学生はアジアでの国際保健分野に貢献すべく、国際人材派遣コンサルタント会社に就職している。

（大阪大学）

大阪大学から派遣した医学部学生（派遣時学部3年生）はいずれも未だ就学中であるが、プログラムをきっかけに、卒業後は海外の臨床機関での就職を希望する学生もいる。

② プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

（神戸大学大学院医学研究科・医学部）

例1：病院実習（4週間）で受入を行った学部学生の中には、将来日本の大学院への進学を希望する学生がいる。これらの学生には、奨学金制度などについての情報提供を行い、進学に向けたサポートを行っている。

実際、平成25年度に病院実習で受入れたインドネシア大学医学部学生1名は、卒業・臨床研修の後、平成27年度10月から本研究科博士課程への入学が決定している。

（神戸大学大学院保健学研究科・保健学科）

例1：3ヶ月の研究プログラムで受け入れたチェンマイ大学看護学部大学院生は、大学院終了後に、出身大学の看護教員（助教）に採用されている。

例2：看護実習（4週間）でチェンマイ大学から受入を行った学部生においては、日本の看護の現場を体験したことで、将来、自国の看護体制の向上に意欲を見出し、進路への確信を持つことが出来たという報告がある。

（大阪大学）

基礎研究室で受け入れた学生の中にはプログラムに参加したことで研究に興味を持ち、大阪大学の大学院への進学を検討している学生がいる。大阪大学ではインドネシアの学生のための奨学金制度があり、積極的な受け入れを検討している。

◆ 24-I 愛媛大学（香川大学、高知大学）

プログラム名：日本・インドネシアの農山漁村で展開する6大学協働サービslラーニング・プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

事業の本格実施2年を経て、学士課程のサービslラーニング・プログラムに参加した学生の中から、「トビタテ！留学JAPAN日本代表プログラム」等により、インドネシアへの長期留学、さらには修士課程進学を希望する学生が出始めている。

現在4回生のサービslラーニング・プログラム参加学生への聞き取り調査により、修士課程進学を希望する学生がいることから、平成28年度以降に各課程間プログラムの連携による成果が現れることが期待される。

修士課程のSUIJIジョイントディグリー・マスター・プログラムを修了した日本人学生の中には、平成26年度より、インドネシアで事業展開する日本企業に就職して現地の関係会社に勤務している者や、取引先のインドネシア企業との交渉を担当する者もいる。

学生のニーズに対応し、自主的な交流や学びをサポートできる体制を構築すること、学士・修士・博士課程からなる多層的なプログラムの連携を高めることが現段階での課題である。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

学士課程のサービslラーニング・プログラムに参加したインドネシア人学生が、香川大学の修士課程に正規生として留学予定である。

大学の世界展開力事業採択前に短期プログラムで愛媛大学に留学したインドネシア人学生のうち2名が、修士課程のSUIJIジョイントディグリー・マスター・プログラムで再度愛媛大学に留学した。

インドネシア人学生の進路は、日本への留学のための奨学金の有無・種類によっては正規生として留学したいという希望が強く、大学による奨学金の確保、及び本人による奨学金獲得時の大学からのサポートの充実が今後の課題である。

◆ 24-I 九州大学（早稲田大学）

プログラム名：地球資源工学グローバル人材養成のための学部・大学院ビルドアップ協働教育プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

H25年度の修士1年生を対象としたスクールオンザムーブ（SOM）参加者のうち、資源関連の企業・政府関連機関に就職したものは8割を超える。SOMは国内大学とASEAN連携大学へ最低3カ国を1ヶ月移動しながら、座学・フィールド調査を行うもので、プログラム終了後は学生の成果発表を英語で行う機会を設けている。また、学生自身も積極的に国際学会への参加・発表を行っており、これら一連の成果が就職活動の際の大きなアピール材料となっていると言える。

サマースクールは学部3年生を対象としており、H25年度の参加者大半は大学院へ進学している。1名は飛び級制度を利用して大学院へ進学し、もう1名は半年間休学し海外の大学へ留学した。

課題として、特にスクールオンザムーブは修士1年生を対象としており、1年目の後半頃からプログラムが始まるが、就職セミナー等の時期と重ならないよう配慮をする必要がある。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

母国及びASEAN地域の資源系企業に就職している。また、H25年サマースクール参加者のうち、九州大学大学院に進学した学生もいる。本学の博士課程リーディングプログラムで学んでいる。

◆ 24-I 慶應義塾大学

プログラム名：アジアの新出課題解決に向けたエビデンスベースドアプローチ大学コンソーシアム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

特記事項なし。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

例1) EBA コンソーシアムを形成するフィリピン大学から、2013年度夏のフィールドワーク（於：熊本県水俣市）に参加した学生（参加当時、修士課程在籍）が、その後も関連する Environmental Engineering の分野で研究を続けて母校の Assistant Professor となり、後進の指導にあたることとなった。加えて、今夏、AUN/Seed-Net の「短期研究継続支援」(Research Fellowship Program) の奨学金を受けて、約1ヶ月間、日本で自身の研究を継続することとなった。

例2) 2013年度のインターンシッププログラムに参加した学生（参加当時、学部4年生）は、インターン期間中の仕事に対する姿勢、物事の学習意欲およびリーダーシップが所属部署の上長によって高く評価され、この上長の推薦により、会社側に正式にフルタイムの職員として雇用されるに至った。現在も、当該企業にて研修を受けている。

◆ 24-I 明治大学

プログラム名：日本 ASEAN リテラシーを重視した実務型リーダー育成プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

本スキームで実施するプログラムを通じて何らかの海外経験をした学生のみにターゲットを絞ったキャリア支援及び卒業・修了後の進路についての追跡調査は実施していない。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

本スキームで実施するプログラムに参加した学生の進路について、追跡調査は行っていない。

◆ 24-II 千葉大学

プログラム名：ツイン型学生派遣プログラム（ツインクル）

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

例1：本プログラムで現地の大学と高校で実習を行った学生の一人は、自分の研究分野が ASEAN における工業製品でどのように応用され、現地でニーズを生み出しているのかに気付き、グローバルな視点から新たなニーズを掘り起こす際の示唆を得たと述べている。カシオに就職後、海外向け製品（カメラなど）の開発に携わっている。

例2：千葉県の小学校に教員として採用された学生は、現地高校での実習で、生徒の多様な文化的背景に応じた授業づくりの必要性和留意点について学んだことを生かしている。具体的には、外国から来た保護者への面談や、子どもに対する指導において、言葉を翻訳するだけではなく、給食における宗教的配慮や、保護者会の意義について丁寧に説明するなど、文化の違いに配慮した教育指導を行っている。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

例1：参加後アンケートにて、本プログラムにおいて研究実習に参加した三分の二の学生は、日本への留学を希望すると回答している。既に本プログラム参加をきっかけにして、本学および日本の他大学に正規学生として留学した学生が現れている。

◆ 24-II 名古屋大学

プログラム名：ASEAN 地域発展のための次世代国際協力リーダー養成プログラム

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

例1：修士1年次に短期プログラムで王立法経大学に行ったことでカンボジアに興味を持ち、現在カンボジアの地雷除去について修士論文を執筆している。チュラロンコン大学、フィリピン大学ロスバニョス校に派遣された学生も、現地での経験をもとに修士論文を執筆している。

例2：海外に派遣した日本人学生は、いまだ在学中の者が多いが、海外留学経験や高い英語力は本プログラムにご協力頂いている企業からも評価されており、就職に繋がることが期待される。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

例1：短期プログラム（二週間）に参加した複数の学生より、半年間の長期プログラムへの参加や名古屋大学への進学を希望する問い合わせがあった。

例2：相手大学であるカンボジア王立法経大学では、長期プログラムに参加した学生が帰国後に本プログラム内容や日本での自分の体験を発表する機会を設けており、学生に周知されている。

◆ 24-II 京都大学

プログラム名：「開かれた ASEAN+6」による日本再発見—SEND を核とした国際連携人材育成

① プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

例 1：SEND の一環として行ったハワイの語学研修に参加した後、移民社会に関心を深め、京都市内の小中学校で移民に対する学習支援ボランティアに参加する。その後、フィリピン大学に短期留学しフィリピン政府にインターンシップに従事した。フィリピン大学とフィリピン政府において SEND プログラムを実施。現在修士論文の執筆中で理論研究を深めるため文科省の制度を利用しエジンバラ大学に留学決定。（修士 2 回生）

例 2：台湾、シンガポールに派遣され、アジア哲学について研究を行う。招聘教員の授業を取り国内外のワークショップや会議で発表。その後、香港中文大学とも交流を深め、本プログラムを契機として発展させている。

例 3：タイ派遣プログラムに参加した日本人学生は、地域計画コンサルタント会社に就職後も、プログラム関係教員と共著の論文を国際学会等で発表してきた。現在は、中小企業振興や地域産業 活性化を通した「地域づくり」の理論と実践について専門性を深めるため、イギリスの大学（開発学修士）に留学する準備を進めている。将来は国際機関や NGO で仕事することを希望している。

例 4：タイ派遣プログラムおよびオランダ・ドイツ派遣プログラムに参加したタイ人留学生は、修士課程を修了後、タイに帰国し、現在はソクラー大学で講師を務めている。数年後を目処に、本学もしくは本学の SGU 連携校であるオランダの大学にあらためて留学し、博士学位を取得することを希望している。

例 5：中国派遣プログラムおよびオランダ・ドイツ派遣プログラムに参加した韓国人留学生は、修士課程を修了後、米国の大学で博士課程研究を続けるための準備を進めてきたが、本年秋からヴァンダービルド大学に進学することが決まった。

例 6：オランダ・ドイツ派遣に参加した日本人学生は、訪問先でもあったドイツ金属労組に関する研究を引率教員および他の参加学生とともに続け、共著論文を大原社会問題研究所雑誌に発表するとともに、同派遣プログラムの連携先であるゲーテ大学に留学し、同論文を発展させた研究成果により Herbert Simon Young Scholars Prize 及び総長賞を受賞した。現在はポスドク研究員として SGU 事業を補佐している。

課題 1：参加者によっては派遣プログラムによる課題についていけず、主専攻や論文執筆に影響が及ぶ事例があると指摘されており、主専攻との両立が課題となる場合がある。

課題 2：派遣プログラムに複数回参加する積極的な学生も多いが（H26 年度派遣 170 名のうち複数回参加者は 19 名で全体の 11%）、豊富な経験を有する分、自らの将来像を十分描き切れずに迷う例もみられる。研究や就職の展望についても適切なガイダンスが必要である。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

例 1：ソウル大学より本事業に参加して、その後ソウル大学の奨学金を得て京都大学に 6 ヶ月間留学した。台湾と韓国の交流も始まり、3 ヶ国間の受け入れにも積極的である。

例 2：フィリピン大学より日本文学の研究のため来日後、博士課程を終え、アテネオ・デ・マニラ大学に就職。

例 3：次世代グローバルワークショップに参加し、翌年の同ワークショップにも別資金で参加。さらに日本研究を深化させるため、別資金での 1 年間来日が決定した。

例 4：二国間にとどまらず地域全体の交流を促進する目的で、単位認定を伴う東アジアジュニアワークショップや次世代グローバルワークショップを開催している。

例 5：本学からのタイ派遣プログラムの受入先でもあるタマサート大学国際学部のアセアン修士プログラムの学生は、交流の経験を踏まえて、その後も継続的に本学主催のサマースクール（昨年度は 14 名）や、交換留学生として 2 ヶ月間（セミクウォーター制）の単位互換プログラム（昨年度は 5 名）に参加している。同大学経済学部からも修士院生が交換留学プログラムに参加し、その後、同大学博士後期課程に進学している。

課題 1：恒常的、日常的交流の促進をしたいと思うが、シンガポール国立大学などとの交流においては先方の大学院生の流動性が高く、継続的で蓄積を伴う交流が困難となっている。ソウル大学や台湾の国立政治大学は修士から博士に進学する率が高く継続交流がしやすい。

課題 2：学年暦の違いから、学年暦に左右されない単位履修者が来日しやすい。そのため参加しやすい学生が偏り、優秀な学生を含む多くの交流が期待ほど広がらない懸念がある。

◆ 24-II 九州大学

プログラム名：スパイラル型協働教育モデル：リーガルマインドによる普遍性と多様性の均衡を目指して

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

- ・パートナー校との交流、SEND プログラムの実施に加え、タイ・新日鐵住金、フィリピン・トヨタ、マレーシア・イオン、国際交流基金クアラ Lumpur・オフィスにおいてワンディ・インターンシップを行い、グローバル人材のロールモデルとして、現地企業で活躍する日本人との対話を経験したこと等をきっかけに、海外事業展開のさかんな企業（JT、ヤマハ株式会社、NTT など）へ就職している。
- ・マラヤ大学、シンガポール国立大学及びチュランロンコン大学との共同開発インターンシッププログラムを企画し、国際機関のひとつであるハーグ国際私法会議香港支部へ本学学生を各 1 名派遣した。参加学生は、国ごとの法文化の多様性と格闘し、かつ普遍性を学び発信するなかで、自己の学習した法制度を批判的に考察する機会を得た。この結果、国際公務員を含む法律家へのキャリア志向を強める事となった。
- ・本事業で得た経験や知見を生かし、さらなる専門性を身につけるため、本学法学府や他大学（東京大学）のロースクールへ進学した学生もいる。

なお、就活解禁日が本年度から後ろ倒しとなった関係で、就職活動のスケジュールの見通しが立たず、ショートターム交流の参加申込に躊躇する学生がいるため、これへの対応が課題と言える。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

本プログラムは、提携校の受入学生の将来に直接的・間接的に寄与している。

パートナー大学からの報告によると、アテネオ・デ・マニラ大学を首席で卒業し、司法試験で上位の成績にて合格を遂げている学生や、大学にて日本語教諭に就いた学生、また弁護士や日本企業からの内定獲得者もいるとのことであった。

また、ショートターム受入参加学生の中には、本学に長期留学のため再来日している学生がおり、本学に限らず、国内の他大学へも長期留学で滞在している学生もいる。

課題は特になく、むしろ好循環を生んでいると言えよう。

◆ 24-II 早稲田大学

プログラム名：「日本語教育学」総合学習プログラムを通じた重層的・循環的人材育成事業

①プログラムで海外大学に派遣した学生の就職（進学）についての事例・課題等

プログラムで海外大学に派遣された大学院生のうちの多くが、日本語教員として本学、他大学ならびに日本語教育機関に就職している。学部生は海外経験を活かしてグローバル企業に就職したり、さらに専門性を深めるべく本学日本語教育研究科に進学した者がいる。

②プログラムで受入れた学生の就職（進学）についての事例・課題等

プログラムで受入れた学生の進学について、何名か日本に長期に留学している例を聞いているが、これまで明確に把握していないため、今後各海外相手大学へ調査依頼を検討している。